

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月20日現在

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22592535
 研究課題名(和文) 養護教諭の健康相談活動スキル向上のためのプログラムの開発
 研究課題名(英文) Development of the health consultation activity skills training program for Yogo teachers
 研究代表者
 高田 ゆり子 (TAKATA YURIKO)
 筑波大学・医学医療系・教授
 研究者番号：90336660

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は養護教諭の行う健康相談活動のスキル向上を目指した参画型プログラムの開発である。健康相談活動のスキルとして改訂版生活分析的カウンセリングとコラージュ技法に焦点をあて研修会を開催し、養護教諭は勤務校でスキルを活用した健康相談活動を実践した。その結果、プログラムに対する評価は高く、スキルを適用された児童生徒の自己肯定度インベントリー得点が有意に上昇していた。このことから、本プログラムの有用性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop the program which aimed at skill improvement of the health consultation activities by Yogo teachers in schools. It focused on the revised life analytic counseling and the collage technique as skills of health consultation activities in school. The study sessions about the theories and skills of children health, applicable to health consultation activities in schools were held. Yogo teachers utilized and practiced the skills in their schools as health consultation activities. As results, the Yogo teachers evaluated the contents of the program highly. As for the students to whom health consultation activity skills were applied, the self-esteem inventory scores went up. The usefulness of this program was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：地域看護学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：学校看護、養護教諭、健康相談活動スキル、プログラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どもの健康問題の複雑化に伴う健康相談活動の充実

今日の子どもの健康問題は複雑多様化してきている。そのため、個別のニーズに対応した健康相談の能力が求められてきている。特に養護教諭のヘルスカウンセリング能力のレベルアップが求められ、平成21年4月に改訂された学校保健安全法では、これまで学校医が行うとされてきた学校保健における健康相談を養護教諭も行うことが明記された。このことは学校保健における養護教諭の果たす役割の拡大と重要性を示すものである。そして、養護教諭独自の活動とされる健康相談活動の充実が求められている。

(2) 子どもが行動変容をして健康行動を確立するための具体的なスキルの必要性

生涯のなかで最も疾病罹患の少ない時期である学童期にありながら、現代の子どもは多くの身体的・精神的不調を訴えている。また、生活習慣の乱れからくる生活習慣病予備軍も増加している。この実態を改善するためには、子どもが主体的に自己の健康問題に取り組むことができるような支援が必要であり、子どもの発達課題に対応した健康相談活動スキルが求められている。しかし、養護教諭が行う健康相談活動の具体的な支援スキルについて標準化されたものはなく、また、理論・モデルに基づいた健康相談活動に関する実証研究は皆無に等しい。

2. 研究の目的

学校現場で子どもの健康支援に重要な役割を果たしている養護教諭が行う健康相談活動のスキル向上のためのプログラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 2010年度(1年目)は下記のような参画型プログラムを編成し、小学校の養護教諭を対象に年5回の研修会を開催した。

各回の研修の項目と目的は以下の通りである。

1回目(7月)

【全体オリエンテーション(30分)】

受講者が研修目的・意義および進め方を理解する。

【子どもの健康課題(講義2時間)】

現代の子どもの健康課題について把握し、その健康課題への支援に関する理論を学ぶ。

【コラージュ技法(講義・演習3時間30分)】

養護教諭が保健室で活用できる健康相談活動スキルの1つとして、コラージュ技法について学ぶ。

2回目(7月)

【改訂版生活分析的カウンセリング

(LAC-R)(講義・演習2時間30分)】

【構成的グループ・エンカウンター(SGE)(講義・演習3時間30分)】

養護教諭が保健室で活用できる健康相談活動スキルの一環としてLAC-R、SGEについて学ぶ。

9月～10月初旬

・児童の健康実態把握と健康問題の明確化のために、受講者は勤務している学校で健康調査を実施

3回目(10月)

【子どもの健康とヘルスプロモーション(講義2時間)】

ヘルスプロモーションの視点から子どもの健康増進について学ぶ。

【子どもの健康課題の明確化(演習3時間30分)】

健康調査結果および日頃の健康相談活動の実態から、子どもの健康課題を明らかにする。さらに、健康相談活動スキルを実践するための意見交換を行う。

10月～12月

・健康調査の結果から、子どもの健康実態に応じて勤務校でスキルを適用した健康相談活動を実践

4回目(12月)

【子どもの健康支援(講義2時間)】

心理学的な視点からの子どもの健康を理解し支援について学ぶ。

【健康相談活動における課題(演習3時間30分)】

健康支援スキルを実践して、その効果と課題について意見交換を行う。

1月～2月

・健康調査の結果から、子どもの健康実態に応じて勤務校でスキルを適用した健康相談活動を実践

5回目(2月)

【子どもの発達課題と健康支援(講義2時間)】

子どもの発達課題を踏まえた健康支援について理論を通して学ぶ。

【健康相談活動スキル向上プログラムの検討】

健康相談活動スキルを向上させるためのプログラム内容について、スキル実践の効果から検討する。

①受講者は第1回、第2回で学習したスキルを勤務校で実践した。そして3回目以降の研修会で実践の意見交換を行った。

②毎回の研修の評価は終了時にアンケートを行った。また、全体的なプログラム評価は、受講した養護教諭を対象に5回の研修終了時にアンケートを実施した。

③健康相談活動スキルの評価は、LAC-R実施前と実施後に児童の健康調査を行い、その結

果を分析した。また、LAC-Rを実際に行った評価についてアンケートを行った。

(2) 2011年度(2年目)は小学校・中学校・高等学校の養護教諭を対象にコラージュ技法に焦点をあてた事例検討会を実施した。対象となった養護教諭は、2008年度から継続して実施している養護教諭の健康相談活動スキル研修を受講している者である。2008年度は中学校の養護教諭、2009年度は高等学校の養護教諭、2010年度は小学校の養護教諭を対象に研修を実施している。2011年度は児童生徒の個別の健康問題の明確化とその問題の改善・解決のために、養護教諭の健康相談活動の一技法として、コラージュ技法を実践し効果を検証することを目的として、年5回の事例検討会(1日3時間)による研修を実施した。

①第1回目に研修の進め方の説明を実施した。受講者が勤務校において、児童生徒の健康相談活動の一方法としてコラージュ技法を継続して実践することを説明した。

②第2回～5回は、受講者が取り組んだ事例について、1回に2～3名の担当をきめて事例発表を行い、意見交換を行った。

③毎回の研修の評価は終了時にアンケートを行った。また、全体的なプログラム評価は、受講した養護教諭を対象に5回の研修終了時にアンケートを実施した。

④健康相談活動スキルの評価は、コラージュの実施前と実施後に児童生徒の健康調査を行い、その結果を分析した。また、コラージュを実際に行った評価についてアンケートを行った。

(3)2012年度(3年目)はプログラムのフォローアップ評価とプログラム開発を行った。プログラムの全体的な評価として、2010年度、2011年度の研修を受講した養護教諭全員にフォローアップ評価を実施し、養護教諭の健康相談スキル向上のためのプログラムの開発を行った。

4. 研究成果

(1)プログラムの特徴

本プログラムは、子どもの『生きる力』を育む教育を健康面から推進するための養護教諭の健康相談活動スキル獲得に焦点をあて、ヘルスプロモーションの理念に基づいた内容とした。プログラムの内容は、①健康の一次予防のための基礎理論(ヘルスプロモーション、ヘルシースクール、セルフエスティーム、ライフスキルなど)、②児童生徒の健康アセスメントと問題の明確化、③認知行動理論に基づく改訂版生活分析的カウンセリング(LAC-R)、④深層心理学理論に基づくコラージュ技法などを中心に構成した。

また、本プログラムの特徴は参画型と継続性である。受講者は、1回目・2回目の研修を受講後、健康実態調査から勤務校の課題を見出し、健康相談活動スキルを実践する参画型のプログラムを1年間継続して実施する。

開発したプログラムは以下の通りであり、1年間を通して実施する。

第1回

9:30～10:00 【オリエンテーション】

目的：受講者がプログラムの目的・意義および進め方を理解する。

使用教材：配布資料

10:00～12:00 【現代の子どもの健康課題】

目的：現代の子どもの健康課題について理解し、支援の方法に関する理論を学ぶ。

研修形態：講義

使用教材：配布資料、パワーポイント、DVD

12:00～13:00 休憩

13:00～16:50 【コラージュ技法】

目的：養護教諭が保健室等で活用できる健康相談活動スキルの1つとして、コラージュ技法について学ぶ。

研修形態：講義・演習

使用教材：配布資料、パワーポイント、台紙、はさみ、のり、雑誌等

16:50～17:00 【諸連絡】

第2回

9:30～12:00 【LAC-R】

目的：養護教諭が保健室等で活用できる健康相談活動スキルの1つとして、LAC-Rについて学ぶ。

研修形態：講義・演習

使用教材：配布資料、パワーポイント、LAC-R 計画図、LAC-R 日程図、ラベル

12:00～13:00 休憩

13:00～16:50 【SGE】

目的：養護教諭が保健室等で活用できる健康相談活動スキルの1つとして、SGEについて学ぶ。

研修形態：講義・演習

使用教材：配布資料、パワーポイント、画用紙、サインペン

16:50～17:00 【諸連絡】

この間、児童生徒の健康実態の把握と健康問題を明確化するために、受講者は勤務している学校で健康調査を実施する。

第3回

10:00～12:00 【子どもの健康とヘルスプロモーション】

目的：ヘルスプロモーションの視点から子どもの健康維持増進について学ぶ。

研修形態：講義

使用教材：配布資料、パワーポイント、

12:00~13:00 休憩
13:00~16:50 【子どもの健康課題の明確化】 目的：健康調査結果から児童生徒の健康課題を明確化する。 研修形態：グループワーク 使用教材：健康調査データ
16:50~17:00【諸連絡】
この間に、健康調査の結果から、児童生徒の健康実態に応じてスキルを適用した健康相談活動を勤務校で実践する。
第4回
10:00~12:00 【子どもの健康支援】 目的：心理学的な視点からの子どもの健康を理解し支援について学ぶ。 研修形態：講義 使用教材：配布資料、パワーポイント、
12:00~13:00 休憩
13:00~16:50 【健康相談活動の実践における課題】 目的：健康相談活動を実践した効果と課題について意見交換を行う。 研修形態：グループワーク 使用教材：受講者の実践データ
16:50~17:00【諸連絡】
この間、勤務校で健康相談活動におけるスキル活用を継続実施する。
第5回
10:00~12:00 【子どもの発達課題とこころの健康】 目的：児童生徒の発達課題を踏まえた健康支援について理論を通して学ぶ。 研修形態：講義 使用教材：配布資料、パワーポイント、
12:00~13:00 休憩
13:00~16:50 【健康相談活動スキル向上の検討】 目的：児童生徒の健康ニーズに対応した健康相談活動スキルについて意見交換を行い考察する。 研修形態：グループワーク 使用教材：健康調査データ、健康相談活動の実践記録等
16:50~17:00【諸連絡】

(2)プログラムの評価

①小学校の養護教諭15名を対象に2010年7月～2011年2月の間の土曜日に5回の研修会を開催した。研修会の内容は、前述した表のように、午前は児童生徒の発達課題や健康課題を理解することを目的とした講義、午後は理論やモデルに基づいた健康相談活動の演習で構成した。評価は、毎回の研修終了時および最終研修終了時にアンケートにより行った。その結果、「プログラムとして適切

である・ほぼ適切である」と回答した割合は、講義では92.3%～100%、演習では76.9%～100%と高い評価が得られた。5回の研修全体の評価は、「良かった・ほぼ良かった」と回答した割合は、「内容」100%、「期間」77%、「時期」53.9%であった。

②2011年に実施したコラージュ技法に関するプログラムは13名(小学校7名、中学校3名、高等学校3名)の養護教諭が参加した。プログラム全体の評価は、回数・時期・内容ともに「適切である」の回答が92.3%と高い評価であった。

③フォローアップ評価

2010年度、2011年度のプログラムに参加した養護教諭全員(22名)にプログラム評価のアンケートを実施した結果、開催回数適切100%、開催時期適切94.1%、研修は役にたった94.1%、研修内容が現在の活動に活かされている88.2%の回答が得られた。プログラムで習得したスキルの活用度は、コラージュ技法52.9%、LAC-R35.3%であった。コラージュ技法、LAC-Rとも保健室頻回来室者、保健室登校や不登校傾向の児童生徒への適応が多かった。SGE、LAC-Rは学級活動としての導入や健康教育活動などの集団活動にも活用されていた。本プログラムの受講感想として、「保健室での対応や保健指導として、LAC-Rやコラージュ技法を活用している」「受講者が多すぎず意見の交換もできて良かった」「コミュニケーションをとることが下手な子どもが多く、色々なスキルを学んで役に立つ」などの意見がみられた。以上のことから、LAC-R、コラージュ技法、SCEは養護教諭の健康相談活動スキルとして、児童生徒の健康増進、健康相談活動に活用できること、さらにプログラムの内容、時程は適切であることも示唆された。継続したスキルの活用と習熟のためのフォローアップ研修が今後の課題である。

(3)子どもの健康実態と健康相談活動スキルの評価

①小学生の健康実態

男子1397人、女子1394人のデータを解析した。その結果、SEの下位尺度の「一般的自己」は男子に比べて女子の方が低かった。心身の訴えは5年より6年が多く、SEの「一般的自己」「家庭場面での自己」は6年が低かった。心身の訴えを従属変数として、性、年齢を調整した多重ロジスティック回帰分析の結果、「一般的自己」「家庭場面での自己」「学校場面での自己」の自己肯定度が高い児童は心身の訴えが低かった。就寝時間が午後9時～10時、朝食を毎日摂取、保健室利用が1ヵ月1回より少ない者は心身の訴えが低かった。小学校4年～6年の心身の訴えには、

自己肯定度および生活習慣が関連していることが明らかになった。児童が自己肯定度を高め、生活習慣を改善するような支援の必要性が示唆された。

②LAC-R の評価

小学4年生～6年生 1786人に健康調査を実施し、自覚症状の訴えの多い児童を中心に養護教諭がLAC-Rを用いた健康支援を実施した。LAC-R実施前後のデータが得られた195人を分析した結果、自己肯定度インベントリーの下位尺度の「家庭場面での自己(p=0.012)」と「学校場面での自己(p=0.016)」はLAC-R実施後は有意に高かった。これらの結果から、本プログラムは養護教諭の健康相談活動スキル向上に貢献できることが示唆された。また、LAC-Rを健康相談活動に取り入れることが適切であるという養護教諭の理由は、「子ども達が自分の生活を振り返る手段として有効なものであり、私も子どもと話す場を設定するきっかけに出きた。」「問題意識を持ち、毎日親子で生活を振り返ることは子どもの健康生活の改善につながると思う。」「指導の一手法として、取り組みやすいと思う。」などが挙げられた。

③コラージュの評価

2011年度にコラージュを作製した児童生徒50名のうち、コラージュ作製前後の質問紙調査の回答が得られた16名を分析した結果、コラージュ作製前後の自己肯定度インベントリー下位尺度の「仲間関係での自己」尺度得点においてコラージュ作製前に比べて作製後は高くなる傾向であった(t=2.08、p=0.09)。コラージュ作製の効果については、「気持ちがすっきりした」87.4%、「自分に自信がもてた」75.0%、「いらいらしなくなった」81.3%、「これからも続けていきたい」100%、と回答していた。「体の具合が良くなった」56.2%がそう思うであったが、その具体的な内容は、「眠れるようになった」4件、「気持ちが明るくなった」2件などがあげられていた。コラージュは自己の気づかなかった内面を整理し表現するのに危険性が少ない技法として適している。そして繰り返し作品を作ることによって、漠然とした自分についてのイメージを再構築し、自分自身の内面では「心の安定」が図られる。また、材料さえ揃えばいつでもどこでもできる手軽さと、そのときの自己の姿が作品に反映されるので、児童生徒の自己理解・他者理解の一方法として有効であると考えられる。今回、児童生徒の自由記述から、そのことが窺われた。これらのことから養護教諭が児童生徒に関わる時の1つのツールとしての有効性も示唆された。今回は対象者数が少なかったため、今後量的な検証のためには標本数を増やしていくことが課題である。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計6件)

- (1) 高田ゆり子, 木村一絵, 坂田由美子, 小学生の健康実態と生活習慣に関する検討, 日本看護科学学会, 2012年11月30日, 第32回日本看護科学学会学術集会, (東京国際フォーラム), 東京
- (2) 高田ゆり子, 坂田由美子, 児童生徒のコラージュ作品の特徴と健康状態との関連—心身の訴えの多い児童生徒を対象にして—, 日本学校保健学会, 2012年11月11日, 第59回日本学校保健学会(神戸ポートピア), 神戸市
- (3) 坂田由美子, 高田ゆり子, コラージュ技法による健康支援の効果, 日本学校保健学会, 2012年11月11日, 第59回日本学校保健学会(神戸ポートピア), 神戸市
- (4) 高田ゆり子, 大門志乃, 坂田由美子, 中学生の健康実態と健康支援に関する研究, 日本公衆衛生学会, 2012年10月25日, 第71回日本公衆衛生学会総会, (山口市市民会館), 山口市
- (5) Yuriko Takata, Yumiko Sakata, Factors related to psychosomatic complaints and self-esteem among Japanese elementary school students. 12th International Congress of Behavioral Medicine. August 30, 2012, Budapest, Hungary
- (6) 高田ゆり子, 木村一絵, 坂田由美子, 地方都市在住の小学生の生活実態と健康との関連, 日本公衆衛生学会, 2011年10月19日, 第70回日本公衆衛生学会総会, (秋田県民会館), 秋田市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 ゆり子 (TAKATA YURIKO)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号：90336660

(2) 研究分担者

坂田 由美子 (SAKATA YUMIKO)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号：30347372
森田 展彰 (MORITA NOBUAKI)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：10251068
村井 文江 (MURAI HUMIE)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：40229943
金丸 隆太 (KANEMARU RYUTA)
茨城大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30361281
村松 照美 (MURAMATSU TERUMI)
山梨県立大学・看護学部・教授
研究者番号：90279894